少年の日の思い出 (3)

ヘルマン・ヘッセ
高橋健二 訳

(二年たち「僕」が大きな少年になった頃、「僕」は、隣の子供・エーミールが、クジャクヤママユを手に入れたといううわさを聞きました。「僕」は自分の本で、このちょうの挿絵を何度も眺めていました。)

エーミールがこの不思議なちょうを持っているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまって、それが見られるときの来るのが待ち切れなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の四階へ上がっていった。そこに、例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが、僕にはどのくらいうらやましかったかわからない。途中で、僕は、誰にも会わなかった。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。①ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

せめて例のちょうを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手に取った。

(中略　クジャクヤママユは展翅板の上に留められ、羽を紙切れで張り伸ばされていました。)

胸をどきどきさせながら、僕は紙切れを取りのけたいという誘惑に負けて、留め針を抜いた。すると、②四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盗みを犯した。僕は、ピンをそっと引っ張った。ちょうは、もう乾いていたので、形はくずれなかった。③僕は、それをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。そのとき、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

ちょうを右手に隠して、僕は階段を下りた。そのときだ。④下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に、僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に、見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は、本能的に、獲物を隠していた手を上着のポケットにつっ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「ドアのハンドルを……わかった」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　クジャクヤママユをどうしても見たいという思い。
イ　珍しいちょうを手に入れたエーミールへの憧れ。
ウ　自分の盗みが見られているのではないかという不安。

(2) ――線②「四つの大きな……僕を見つめた」とあるが、ここで用いられている表現技法を選びなさい。

ア　体言止め　イ　倒置　ウ　直喩　エ　擬人法

(3) ――線③「僕は、……部屋から持ち出した」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　自分の部屋を持つエーミールに対するうらやましさ。
イ　クジャクヤママユを手に入れたことへの満足感。
ウ　大それた恥ずべきことをしたことへの冷たい気持ち。

(4) ――線④「下の方から……聞こえた」とあるが、この後の「僕」の心情の変化を説明した文となるように、解答欄に当てはまる言葉を本文中から指定の字数に合うように探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点も字数に含む。

（A・十五字）ということを悟り、誰かに（B・十九字）に襲われた。

A 〜

B 〜